

# 経済学史研究会の回顧と展望

— 第 200 回例会を記念して —

## Commemorating the Two Hundredth Meeting of Kwansei Gakuin University's Society of History of Economic Thought : Remembering the Past and Envisioning the Future

田 中 敏 弘

The purpose of the paper is to remember the past and envision the future of Kwansei Gakuin University's Society of History of Economic Thought.

September 7, 2010

Toshihiro Tanaka

JEL : B31

Key words : The society for the study of history of economic thought, Commemoration of its two hundredth meeting.

### はじめに

関西学院大学の経済学史研究会は今回第 200 回例会を迎えることとなった。この記念すべき一つの節目に当たり、研究会の展開過程に想いをいたし、ここにあらためて取り上げ、今後の一層の発展のために、何らかの示唆が与えられるならば幸いである。

### I 経済学史研究会創設の経緯 —「堀研究会」との関連について—

まず、われわれの研究会の大きな特質のひとつである、その創設に際して

のいきさつについて以下に述べておくことにしたい。

この研究会はもともと、堀経夫先生を中心に組織された経済学史、経済思想史、社会思想史、さらに経済史をも含む、ごく広い意味の経済学史の研究会であった。それは通称「堀研究会」という名称で呼ばれていた。

(堀経夫先生は 1896 年(明治 29 年)に北海道函館市で堀卓次郎の長男として生れ、その尊父の広島高等師範学校教授就任にともない広島に移り、広島高等師範附属中学を卒業し、ついで第三高等学校に進学。同校を 1917 年(大正 6 年)に卒業。同年に京都帝国大学法科政治経済学科に入学。1919 年(大正 8 年)に京都帝国大学に新設された経済学部編入。同学部を 1920 年(大正 9 年)に卒業。引続き同大学大学院に進学。1922 年(大正 11 年)東北帝国大学法文学部助教授に就任。翌 1923 年(大正 12 年)から 2 ヶ年間、イギリス、フランス、ドイツおよびアメリカに留学。1925 年(大正 14 年)に帰国し、東北帝国大学教授に就任。

1932 年(昭和 7 年)に大阪商科大学教授に就任。また 1936 年(昭和 11 年)には、関西学院大学商経学部教授を兼任。1942 年(昭和 17 年)大阪商科大学予科長を兼任。第二次大戦後 1948 年(昭和 23 年)に関西学院大学経済学部教授に就任。

1950 年(昭和 25 年)に経済学史学会が創設されたが、その設立発起人の 1 人となり、常任幹事となった。同年に関西学院大学大学院経済学研究科の開設と共に研究科指導教授となった。1954 年(昭和 29 年)には関西学院大学経済学部長に選任され、1955 年(昭和 30 年)には学長に選任された。以後 1966 年(昭和 41 年)まで 4 期 11 年の間学長をつとめた。

学界では、1958 年(昭和 33 年)に経済学史学会代表幹事となり、1968 年(昭和 43 年)まで 10 年余りにわたり、学会代表として尽力した。

1966 年(昭和 41 年)に関西学院大学を定年退職。同年、四国学院大学長となり、また同年に日本学士院会員に選ばれた。1969 年(昭和 44 年)、芦屋大学教授となる。1981 年(昭和 56 年)9 月に召天。享年 85 歳であった。以上は筆者の『堀経夫博士とその経済学史研究。(玄文社、1991 年)Ⅱ-1、堀経夫先生略歴による。)

この堀研究会—とくにその初期については、久保芳和会員（以下堀先生以外はすべて敬称を略す）による「堀研究会記録」（堀経夫博士喜寿記念『経済学の研究と教育の五十年』（世界保健通信社、1973年）の冒頭に記されているので参照されたい。（付1を参照。）

それによれば、堀研究会がいつ頃から始まったかの詳細な記録はないが、研究会が一つの組織としての研究会活動を開始したのは戦後のことである。久保芳和氏が参加し、記録をとり始めた1946年（昭和21年）以降に、伊丹稲野の堀先生宅で開かれたと記されている。なお詳しく言えば、堀研究会は、はじめ二つの研究会に分かれていた。一つは17・18世紀を中心とした「経済思想史研究会」であり、もう一つは19世紀を中心とした「19世紀研究会」であった。

ちなみに、1948年（昭和23年）5月現在の会員には、大道安次郎（社会学、スミス研究）、三谷友吉（近代経済学史）、川村大膳（歴史、経済史）、久保芳和（経済学史）、小谷義次（財政学）、余田博通（社会学）、西村孝夫（経済史）、川口慎二（金融論）、入江奨（経済理論、学史とくにスミス研究）の名が挙げられている。これらの氏名から見ても、経済学史、近代経済学史、経済史、経済理論以外に歴史、財政学、社会学、金融論なども含む研究者が会員に入っていることから、最も広い意味の、経済学史をはるかに越えた専門領域の研究者が含まれていたと言える。これはもともと、堀先生が、経済原論、経済学史、経済史、さらに社会思想史研究をも含む広い経済学の研究に従事する大家とみなされていたことによるものであろう。普通に考えられる広義の経済学史研究を越え、堀先生の広い学識を評価してのことと思われる。

1946年（昭和21年）7月27日の第1回研究会から1973年（昭和48年）5月27日までの記録は、筆者によって『前掲書』の747－63頁に記されている。（付2を参照）。なおこれには、堀先生が学長として赴任された四国学院大学学長宅において行われた広義の研究会（1967年5月から1969年3月まで）の記録も記されている。

## Ⅱ 堀研究会から経済学史研究会への展開

このように、堀研究会は 1946 年 7 月から 1981 年 3 月まで 35 年にわたって行われた。しかし、堀先生は 1981 年 9 月 18 日に逝去され、研究会は自然に解消する事態に至った。しかし、先生の没後約 2 ヶ月後に、研究会は「経済学史研究会」と名称を変えて新たに発足することとなった。1981 年 11 月 18 日付けで、「堀研究会会員の皆様へ」という、久保芳和会員の了承のもと、筆者が記した文書が配布された。これによって、これまでの堀研究会を発展的に解消し、新たに「経済学史研究会」として、研究会を実質的に存続させる呼びかけがなされた。（付 3 を参照。）

それによれば、およそ次のように記されていた。

- 1) 研究会の名称は（経済思想史・社会思想史を含む広義の）「経済学史研究会」とする。
- 2) 会場は関西学院大学内（商経研究館）とする。
- 3) 研究会の会員は、久保芳和会員を中心に、「堀研究会」の会員中、一応関西学院大学関係者を主要メンバーとし、他の会員でこの趣旨に賛同される方々を歓迎する。
- 4) 例会は、原則として毎月 1 回、土曜日の午後に行う。なお第 1 回例会は 1982 年 1 月に行う予定。

予定通り開催された第 1 回例会では、井上琢智会員による報告が行われた（上宮智之会員によって作成された「経済学史研究会例会記録」、付 4 参照）。

それ以後、さまざまな事情により、毎年 9 回から 7 回程度行われ、最近では夏の合宿例会を含め、年 6 回に落ち着いている。なお、堀研究会および経済学史研究会の事務局責任者については、ほぼ次のような順で受け継がれ今日に至っている。久保芳和会員→田中敏弘会員→張光夫会員（以上は堀研究会）→篠原久会員→本郷亮会員→篠原久会員・上宮智之会員。

## Ⅲ 経済学史研究会の今後の発展に向けて

「経済学史研究会 200 回例会記録」を見て、あらためて感じたことを以下に記し、今後の展望のきっかけとしたい。会員の意見や提案を求めたい。

1. 研究会の研究対象は今も堀研究会から受け継がれてきた、広い意味の「経済学史研究」を維持すべきと思われる。これにはとくに異議はみられないと思われるがどうであろうか。
2. 学史研での報告は、約 90 分という十分な時間をかけた報告と率直な質問・討論の約 90 分が重要な役割を果たしてきたと思われる。今後もこれを維持し、さらに一層の工夫により、より有効に行われることが望まれるがどうであろうか。
3. こうした研究報告の積み重ねから実を結んだ著書や論文集などは、合評会という形でさらにコメントを受け、全体としての評価を受けることも重要である。(篠原久会員によれば、この合評会という形式は杉原四郎氏の示唆によって始まったとされているが、これは他の多くの会員による希望でもあった。
4. 研究会では、時に国内の研究者をゲスト・スピーカーとして招くことも行われてきた。こうした積極的な交流を今後も何らかの形ですすめることが有益であるが、どうであろうか。
5. なお、これは関西学院大学経済学部との関係から、海外よりのスピーカーを適時迎え、「経済学セミナー」が開催され、それが経済学史研究会メンバーを中心に公開されてきた。これは今後、どのような形で実質的に展開されてくるのであろうか。
6. インターネットの普及により、通信事情は大きく変わった。にもかかわらず、直接に研究報告を聞き、その場でコメントし、自由に討論できる研究会方式のもつ重要性は不変と思われるが、どうであろうか。
7. (これは竹本洋会員によって、今回とくに最的確に指摘され、その重要性が強調された。もちろん他の会員によっても堀研究会以来の研究会の最大の特徴として強調されてきたところであるが、経済学史研究において、そもそも古典としての原典を自分自身でまず読むことは何よりも重視され、堀先生以来、とくに久保芳和会員、田中敏弘会員等により明確に引き継がれてきた。ときに「原典主義」という言葉で表現され、若い研究者はこうした研究姿勢のもとにきたえられてきた。

これは現在、篠原久会員、井上琢智会員、竹本洋会員を中心に具体的に継承されている。ただ継承されているだけでなく、いかにすれば、研究会のマンネリ化を防ぎ、さらに研究レベルを高く引上げてゆくかが検討されている。

このいわゆる「原典主義」の重要性は会員の多くによってあらためて指摘された。また、この「原典主義」は、堀先生の大英博物館における原典の筆写以来、その貴重な写本を会員に自由に貸し出されたことや、またその後、ペティの著作やアダム・スミスの *Moral Sentiments* などの古典のリプリント版が出され、学史研究者に多大の利益が与えられた。）

8. 堀先生のこうした「原典主義」は、のちそれを継承する筆者や篠原久会員、井上琢智会員、竹本洋会員らの努力によって、関西学院大学図書館に古典的な原典が単一的に、あるいはコレクションとして所蔵されることとなった。スコットランド啓蒙、アイルランド啓蒙、ヒューム、ステュアート、スミス、さらにジェボンズ、ワルラス関連の蔵書も多い。（メンガーについては、一橋大のメンガー文庫のコピーがすべて入っている。）このようにして、とくに学史研の活動以後、これらの多くの古典のコレクションが関西学院大学図書館に所蔵され、今日に至っている。今後これはいかに継承されてゆくのであろうか。
9. （なお、竹本洋会員は学史研の性格の変化を指摘している。関西学院大学はこれまで学史研に場所を提供してきたが、現在ではインターネットなどにより、研究会はわが国のすべての学史研究者に対してオープン化されている。なお、竹本会員は、例えば若い研究者の研究経過を紹介し、コメントを加えるような試みを、毎回ではないが、時に行なうのもよいのではないかと提案している。）

（最後に一言ふれておきたいことがある。それは通常このような研究会では見られないことであるが、学史研では今も茶菓が振舞われている。これも、もともと堀研究会に発し、堀先生の奥様の温いお心の現われであったものが形を変えて自然と引き継がれていると思われる。これ

は小さなことかも知れないが、緊張のうちにもなごやかさを加えるものである。)

(追記)

この第 200 回例会を記念する研究会のさいに、メモ書きにすぎない筆者の小文を代読された井上琢智会員をはじめ、篠原久会員、竹本洋会員、熊谷次郎会員、渡辺邦博会員、渡辺恵一会員、その他の方々が、その都度、補足すべきことや感想や、あるいは提案など、さまざまな観点から、話しの展開に参加し、貢献していただいた。これによって、この小文は豊富なものとなった。不十分ながら、それらを適宜とり入れることができた。ただ堀先生についてはよくご存知の方は今や少ないのではないかと考え、やや詳しく記した。

なお、200 回記念の例会の様子は、上宮智之会員によって録音され、CD に収められた。筆者はこの小文を書くに当たり、この CD に多くを負うている。これを感謝と共にここに特記しておきたい。

## 【付 1】

### 堀研究会記録

現在まで続いている「堀研究会」がいつごろから始まったかの詳細な記録はないが、昭和七年二月に先生が東北帝国大学から大阪商科大学に転ぜられた直後の五月三十一日に「経済古典研究会」が発足した。これは大阪商大の学生によって組織された研究会であった。

その後、研究者のみをもって組織する研究会が発足したが、その正確な年月日は不明である。大道安次郎教授の記憶によれば、その開始は昭和十年頃、場所は旧大阪商科大学の堀研究室で、オリジナル・メンバーは大道安次郎、三谷友吉、岡本博之、浅井正男の四氏であり、毎週一回研究会をおこなっていたということである。昭和十二・三年頃には吉田秀夫氏も時々参加され、この研究会は戦時中も続行されていたが、空襲警報のため研究会を中断したこともあったという。

「堀研究会」が研究会として組織的となり記録もとり出したのは久保が復員して研究会に参加した昭和二十一年七月以降である。この頃には研究会は定例月一回であり、場所は堀先生宅であった。

昭和二十三年五月現在の「堀研」のメンバーは、大直安次郎、三谷友吉、川村大膳、久保芳和、小谷義次、余田博通、西村孝夫、川口慎二、福原行三、入江奨であって、『経済思想史辞典』（昭和二十六年・創元社刊）の企画が話し合われたのもこの頃の研究会の席上においてであった。

その後、「堀研」のメンバーに増減はあったが、昭和二十八年末までに「堀研」に加入された方々は次の諸氏であった。

西川清治（二三・九）、松田勇（二三・一〇）、安田信一（二三・一二）、行沢鍵三、平林忠雄、相見志郎（二四・四）・大前朔郎（二四・九）、山崎時彦（二四・一〇）、高木種夫（二五・一）、縄田栄次郎、内多毅（二五・四）、天川潤次郎（二七・八）、和田貞夫（二七・一二）、田中敏弘（二八・七）、宮内博、林登良雄、飯塚一郎（二八・一二）。

以下に記す記録は一部空白期間はあるが、研究会そのものは定例月一回堀先生宅で開催されていたのであって、ただ原稿締切までに空白期間の記録をさがし出すことができなかったことによるにすぎない。なお昭和二十六年から昭和三十一年までは研究会を二つに分け、一方を経済思想史研究会、他方を十九世紀研究会と称したことがある。後者を十九世紀研究会と称したのは堀先生を代表者とし、豊倉三子雄、安田信一、行沢健三、佐藤明、大前朔郎、久保芳和を研究分担者とする文部省科学研究費による研究チームを編成していたからである。従ってこの時期には、二つの



研究会がそれぞれ定例月一回の研究会を堀先生宅で開いていたわけである。

最後に、先生が昭和四十一年四月に、四国学院大学学長になられてから以後、昭和四十二年五月から四十四年三月まで、四国在住の研究者による「堀研究会」が四国学院大学学長住宅において定例月一回開かれていたことを附記しておきたい。

(久保芳和記)

(堀経夫博士喜寿記念『経済学の研究と教育の五十年』世界保健通信社、昭和四十八年より)

【付2】

昭和二十一年（一九四六年）

七月二十七日

Routh 著 文学を通じて見たる社会

——主としてラスキンを中心として——

中 村 幸太郎

八月十六日

Edmund Burke, Thoughts on the  
cause of present discontents.

川 村 大 膳

九月二十二日

資本主義と社会主義

浅 井 正 男

十一月十七日

Hobson, The Evolution of Modern  
Capitalism.

久 保 芳 和

昭和二十二年（一九四七年）

一月十九日

スミス学説の独乙への移入

大 道 安次郎

二月二日

Webb, Soviet Communism.

E・パークの政治思想

川 村 大 膳

三月九日

重商主義社会観について

—— Heckscher によりて——

久 保 芳 和

四月二十日

マルクスとスミス

大 道 安次郎

五月十一日

パークの議会政治論

川 村 大 膳

五月二十五日

単純労働と複雑労働について

三 谷 友 吉

六月十五日

中世社会観について

久 保 芳 和

六月二十九日

スミス及び古典学派のアメリカへの流  
入

大 道 安次郎

七月六日

土地囲込運動後の最低賃金政策につい  
て

西 村 孝 夫

七月二十日

E. Burke とアメリカ問題

川 村 大 膳

八月三日

経済学の新動向

三 谷 友 吉

八月十日

W. Ogilvie

西 村 孝 夫

八月十七日

フランクリンとスミス経済学

大 道 安次郎

八月二十四日

経費論

小 谷 義 次

八月三十一日

Burke の政治思想

川 村 大 膳

九月十四日

Heckscher 国力体制としての重商主義

久 保 芳 和

十一月十六日 経費論序説		名誉改革について	川 村 大 膳
	小 谷 義 次	六月六日 経済発展段階説	
十一月二十三日 『経済思想史辞典』担当部分の執筆プ ランの発表	久 保 芳 和 西 村 孝 夫	西 村 孝 夫	
十二月十四日 ケインズについて		六月二十日 入 江 奨	
	入 江 奨	七月四日 大 道 安次郎	
<b>昭和二十三年（一九四八年）</b>		七月十八日 川 口 慎 二	
一月十八日 ノース解説		八月一日 ヒックスの限界生産力説	
	久 保 芳 和		入 江 奨
執筆プラン発表	三 谷 友 吉	八月十五日 三 谷 友 吉	
二月一日 為替相場		八月二十九日 久 保 芳 和	
	三 谷 友 吉	〔九月二十六日、十月十五日、十一月 十四日については記録なし〕	
二月十日 ウェーバーの国民主義と議会主義		十一月二十八日 W. S. Jevons の学説について	
	山 崎 時 彦		福 原 行 三
二月二十二日 一般均衡論の認識価値		十二月十二日 近代的貨幣理論	
	三 谷 友 吉		安 田 信 一
三月七日 マルサス		十二月二十六日 産業革命について	
	入 江 奨		西 村 孝 夫
三月二十一日 四月十七日 West について	大 道 安次郎	<b>昭和二十四年（一九四九年）</b>	
		一月十六日	
五月二日 五月二十三日	余 田 博 通 小 谷 義 次	サン・シモンと唯物史観	松 田 勇
		一月三十日	
		E. West の収獲逓減の法則	
			余 田 博 通
		二月十三日	
		J. Rae, The sociological theory of capital について	入 江 奨

三月十七日  
マルクス主義経済学の方法  
西 川 清 治

四月十日  
ディヴィッド・ヒュームの重商主義批判  
久 保 芳 和

四月二十四日  
E. West の収獲逡減の法則  
余 田 博 通

五月八日  
ミルトンの政治論  
川 村 大 膳

五月二十二日  
ジェヴォンズの資本理論  
福 原 行 三

六月五日  
ケインズの『一般理論』解説  
川 口 慎 二

六月十九日  
トインビーの産業革命史論  
西 村 孝 夫

七月三日  
ペティにおける自然法の概念について  
小 谷 義 次

七月十七日  
ミーゼスの貨幣及び流通手段の理論  
安 田 信 一

七月三十一日  
オーエン、ラナーク州知事への報告  
松 田 勇

八月十四日  
バートン機械論  
三 谷 友 吉

八月二十八日

最近のスミス研究  
大 道 安次郎

九月十一日  
アダム・スミスと理神論  
行 沢 健 三

九月二十五日  
タッカーの自由貿易論  
相 見 志 郎

十月九日  
フェピアニズムの性格  
大 前 朔 郎

十月二十三日  
ミルトンの予定説  
川 村 大 膳

十二月十一日  
ジョン・ロックの父権論  
山 崎 時 彦

**昭和二十五年（一九五〇年）**

一月十五日  
終戦後の財政  
西 川 清 治

二月十二日  
ニコラス・バアボンの価値論  
久 保 芳 和

三月五日  
ウエスト  
余 田 博 通

三月二十六日  
ウェップの最低限政策と苦汗制度  
大 前 朔 郎

四月九日  
スミスにおける自然法と社会契約説  
大 道 安次郎

四月三十日

ジョン・ロックの政治論の妥協性について

山崎時彦

五月十四日

クロムウェルの Army Manifests

川村大膳

五月二十八日

J. Mill の政府論について

福原行三

六月十一日

ヴァンダーリントの貿易論

相見志郎

六月二十五日

物価と貨幣の流通法則

安田信一

七月九日

一八世紀イギリス文学と市民社会

内多毅

七月二十三日

宗教と経済

小谷義次

八月六日

B. Franklin の経済思想

久保芳和

八月二十日

リカードウ効果について

川口慎二

九月十日

スウィーザーの Fabian Economy について

大前朔郎

十月一日

ロックとルソーとの関係

山崎時彦

十月十五日

クロムウェル

川村大膳

十一月五日

J. S. Mill の生産および分配論

福原行三

十一月十九日

トークの貨幣理論

安田信一

十二月十七日

ルイズ・ロバートの経済思想

相見志郎

# 昭和二十六年（一九五一年）

五月二十日

川口慎二

六月十七日

救貧法について

大前朔郎

七月十五日（一九世紀研究会）

産業革命史の方法論

佐藤明

七月二十二日

川村大膳

七月二十九日（一九世紀）

豊倉三子雄

八月十二日（一九世紀）

安田信一

八月十九日

トマス・ペインの政治思想

山崎時彦

九月二日（一九世紀）

行沢健三

九月二十三日

福原行三

九月三十日（一九世紀）

大前朔郎

十月二十一日

内多毅

十一月二十五日（一九世紀）

佐 藤 明  
 十二月十六日 相 見 志 郎  
 十二月二十六日 (一九世紀)  
 一八二五年恐慌  
 豊 倉 三子雄  
**昭和二十七年 (一九五二年)**  
 二月三日 (一九世紀) 久 保 芳 和  
 二月十日 (一九世紀)  
 安 田 信 一  
 二月十七日 (一九世紀)  
 大 前 朔 郎  
 三月三十日  
 B・フランクリンとスコットランド  
 久 保 芳 和  
 四月二十七日  
 人口理論のアメリカ型  
 大 道 安次郎  
 六月一日 (一九世紀)  
 イギリス産業資本の階級的確立の史的展開 佐 藤 明  
 六月八日 山 崎 時 彦  
 七月六日 相 見 志 郎  
 七月十三日 (一九世紀)  
 ウィリアム・コベット  
 大 前 朔 郎  
 八月三日  
 ケインズの重商主義論  
 福 原 行 三  
 八月十日 (一九世紀)  
 Ricardo, Say, Malthus, Sismondi  
 豊 倉 三子雄  
 八月二十四日 (一九世紀)  
 安 田 信 一  
 九月七日

ジョン・バニヤンの宗教思想  
 内 多 毅  
 九月二十八日 (一九世紀)  
 行 沢 健 三  
 十月十九日  
 ヘイズ『消費・貯蓄・雇用』  
 大 前 朔 郎  
 十月二十六日 (一九世紀)  
 チャーティズムについて  
 堀 経 夫  
 十一月十六日  
 T・モアのユートピア  
 山 崎 時 彦  
 十一月二十三日 (一九世紀)  
 佐 藤 明  
 十二月二十一日  
*spectator* について  
 内 多 毅  
 十二月二十八日 (一九世紀)  
 久 保 芳 和  
**昭和二十八年 (一九五三年)**  
 一月二十五日 川 村 大 膳  
 三月二十二日 (一九世紀)  
 安 田 信 一  
 三月二十九日  
 スミスとフランクリン  
 久 保 芳 和  
 四月二十六日 (一九世紀)  
 豊 倉 三子雄  
 五月十日  
 W. Petty  
 小 谷 義 次  
 六月七日  
 トマス・ペインの政治思想の現代的意

義	山 崎 時 彦	Tooke, History of Price, 1814-18,
六月十四日 (一九世紀)		安 田 信 一
	行 沢 健 三	三月七日
七月十二日	相 見 志 郎	ラッサールの経済思想
八月二日 (一九世紀)	大 前 朔 郎	林 登良雄
八月九日	和 田 貞 夫	四月四日
八月三十日 (一九世紀)		自由放任論の哲学的基礎
	佐 藤 明	——マンデヴィルの自然的自由主
九月六日		義—— 田 中 敏 弘
スミスの資本論について		六月六日 宮 内 博
	入 江 奨	七月四日
九月二十七日 (一九世紀)		Pierre Bayle の社会批判
Ricardo の銀行論		岩 坪 紹 夫
	安 田 信 一	九月五日
十月四日		ベティ研究
一七世紀における英国経済理論と古		小 谷 義 次
典学派	飯 塚 一 郎	九月十九日 (一九世紀)
十月二十五日 (一九世紀)		安 田 信 一
	豊 倉 三子雄	十月十日
十二月六日		近代自然法と抵抗権の思想
対仏自由通商とD・デフォー		山 崎 時 彦
	天 川 潤次郎	十月二十四日
昭和二十九年 (一九五四年)		Bentham
一月十日		久 保 芳 和
Robert Grenville の清教徒革命思想		十一月十四日 川 村 大 膳
について		十二月十二日
	川 村 大 膳	ジェイムズ・スチュアートの価値及び価
一月十七日 (一九世紀)		格理論 飯 塚 一 郎
Anti-Corn Law League, 1838		昭和三十年 (一九五五年)
	行 沢 健 三	一月二十三日 天 川 潤次郎
二月七日		一月三十日 (一九世紀)
重農学派とフランクリン		行 沢 健 三
	久 保 芳 和	二月二十日
二月十四日 (一九世紀)		ケインズの所得概念

和 田 貞 夫  
 二月二十七日 (一九世紀)  
 豊 倉 三子雄  
 三月二十日 余 田 博 通  
 四月二日 (一九世紀) 佐 藤 明  
 四月十七日 田 中 敏 弘  
 五月二十九日 (一九世紀)  
 大 前 朔 郎  
 六月五日 久 保 芳 和  
 七月十日 川 村 大 膳  
 七月十七日 (一九世紀)  
 大 前 朔 郎  
 八月十四日  
 ベンサム  
 久 保 芳 和  
 八月二十一日 西 村 孝 夫  
 九月十八日  
 ミルの社会主義思想  
 福 原 行 三  
 十月十六日  
 スミス経済思想に関する一研究  
 宮 内 博  
 十月二十三日 (一九世紀)  
 行 沢 健 三  
 十一月二十日 天 川 潤次郎  
 十一月二十七日 (一九世紀)  
 佐 藤 明  
 十二月五日  
 ジョージ・パークレイとマンデヴィル  
 田 中 敏 弘  
 十二月十八日 (一九世紀)  
 大 前 朔 郎  
 昭和三十一年 (一九五六年)  
 一月八日

リカードウの経済発展の問題  
 林 登良雄  
 二月二十六日  
 一六二〇年代初期の商業恐慌と初期  
 重商主義理論 田 中 敏 弘  
 四月一日 林 登良雄  
 五月二十日  
 シュンペーターの帝国主義論  
 小 谷 義 次  
 六月十日 (一九世紀)  
 行 沢 健 三  
 六月十七日  
 Francis Bacon と東印度貿易の関係  
 西 村 孝 夫  
 七月十九日 (一九世紀)  
 安 田 信 一  
 八月五日 (一九世紀) 久 保 芳 和  
 八月十二日  
 Workhouse の社会経済史的意義  
 天 川 潤次郎  
 九月十六日  
 フランクリンとスミス  
 久 保 芳 和  
 九月二十三日 (一九世紀)  
 佐 藤 明  
 十月十四日  
 マンデヴィルとシャフツベリー  
 田 中 敏 弘  
 十一月十一日  
 フランクリンと啓蒙思想  
 久 保 芳 和  
 十二月九日  
 共同体の土地所有の性格  
 余 田 博 通



昭和三十二年（一九五七年）

一月二十七日

一七世紀イギリス立憲運動史料について

——「人民協定」の変遷——

川 村 大 膳

三月十日

ルイス・ロバーツの外国貿易論

西 村 孝 夫

四月二十八日

戦後のアメリカに於る経済発展の一特質

宮 内 博

六月二日

一七世紀初期のイギリス冒険商人組合の構成とその貿易の実態

天 川 潤次郎

七月二十八日

リカードウの固定・流動資本についての一考察

林 登良雄

八月二十五日

ミルの歴史観

福 原 行 三

九月二十九日

新発見のバートンの草稿について

真 実 一 男

十月二十七日

ヒュームとスミス

——歴史と理論、経済発展を中心として——

田 中 敏 弘

十二月十五日

日本農村の集団累積構造

——宝塚市農村調査を中心に——

余 田 博 通

昭和三十三年（一九五八年）

二月九日

John K. Fairbank, East Asian Views of Modern European History. 1957

について

川 村 大 膳

四月六日

H. Würgler, Malthus als Kritiker der Klassik, 1957 について

久 保 芳 和

五月十八日

アダム・スミスの東インド貿易論

西 村 孝 夫

六月二十二日

アメリカの援助について

小 谷 義 次

八月十七日

『国富論』にあらわれた毛織物製造の実態について——特に技術的視点より——

宮 内 博

九月十四日

スペイン植民帝国の没落

——経済的衰退の原因について——

天 川 潤次郎

十月十九日

ミルとアイルランド問題

福 原 行 三

十一月三十日

重商主義解体期の一考察

——D・ヒュームの経済理論——

田 中 敏 弘

十二月十四日

維新史料としてのアメリカン・ボード布教記録

川 村 大 膳

昭和三十四年（一九五九年）

- 一月十八日  
村落共同体について  
余 田 博 通
- 四月五日  
東インド貿易海運史の一断面  
西 村 孝 夫
- 六月七日  
レイモンドの経済学について  
久 保 芳 和
- 七月五日  
製釘業を中心とするイギリス金属工業  
の経営形態 天 川 潤次郎
- 八月二十三日  
ゴシック服飾に関する一評価  
宮 内 博
- 九月二十日  
マックス・ヴェーバーの共同体論  
田 中 裕
- 十月二十五日  
J・Sミルの経済学の論理構造につい  
て 福 原 行 三
- 十二月二十日  
わが国におけるリカドウ経済学の導  
入について 真 実 一 男
- 昭和三十五年（一九六〇年）**
- 一月二十四日  
三小冊子におけるマルサスの穀物保護  
貿易思想について 橋 本 比登志
- 四月二十四日  
経済学における歴史の問題——スミス  
の場合—— 西 村 孝 夫
- 七月三日  
十八世紀イギリスに於ける商業取引方  
法の発展について 天 川 潤次郎
- 八月七日  
アメリカ時代のリスト経済学の構想  
久 保 芳 和
- 九月四日  
清教徒革命の史料について  
川 村 大 膳
- 十月九日  
村落共同体  
余 田 博 通
- 十一月二十日  
大衆文化論  
張 光 夫
- 十二月十八日  
ジェームズ・ミルの初期の経済学の特  
色 林 登良雄
- 昭和三十六年（一九六一年）**
- 一月二十二日  
マルサスの価値論と地代論  
——『原理』第二版を中心として——  
橋 本 比登志
- 四月九日  
アダム・スミスの地代論  
——特に『富国論』一篇十一章三節  
の考察—— 宮 内 博
- 六月四日  
ミルの階級分析  
福 原 行 三
- 七月九日  
十八世紀前半のロンドン商工業者  
——キャンベル「ロンドン・トレイズ  
マン（一七四七年）」による——  
天 川 潤次郎
- 九月十日  
リカドウ書簡にあらわれたミル氏の

理論 林 登良雄  
十月九日  
農村々落社会の論理構造  
余 田 博 通  
アメリカにおける経済学史研究について  
田 中 敏 弘  
(スライドの映写あり)  
十一月十九日  
知識社会学とマス・コミュニケーション研究の交渉  
——マートンの所説を中心とする方法論的考察—— 張 光 夫  
十二月十七日  
マルサスの労賃・利潤論  
——『原理』第二版を中心として——  
橋 本 比登志  
**昭和三十七年(一九六二年)**  
一月二十八日  
最近のリカードウ機械論について  
真 実 一 男  
三月二十五日  
シニョアの経済学について  
福 原 行 三  
四月二十九日(桑田ハウス)  
ジェームズ・ミル『商業擁護論』をめぐる諸問題 林 登良雄  
(この日、堀先生の六六才の誕生日と、久保・西村両氏の海外留学からの帰国を祝して会食す)  
六月十七日  
欧米留学研究報告及び雑感  
久 保 芳 和  
(スライド映写あり)  
七月二十一日

イギリス東インド貿易史紀行  
西 村 孝 夫  
九月八日  
デフォアのイギリス毛織物工業論  
天 川 潤次郎  
十月六日  
エコノミストとしてのデイヴィッド・ヒューム 田 中 敏 弘  
十一月十七日  
非説得的コミュニケーションの機能について 張 光 夫  
十二月十五日  
セーの生産論——『経済学』第一～十三章を中心として——  
橋 本 比登志  
**昭和三十八年(一九六三年)**  
一月二十七日  
W. Ellis の機械論  
真 実 一 男  
三月二十二日  
シニョアの経済政策論  
福 原 行 三  
四月二十八日  
ジェームズ・ミルの商業についての若干の問題 林 登良雄  
六月八日  
イギリス産業革命とインド木綿工業  
西 村 孝 夫  
七月十三日  
Labaree, “Conservatism in an Early American History” について  
久 保 芳 和  
九月七日  
企業家の原型——プロジェクター

(Projector) について  
天 川 潤次郎  
十月十二日  
エコノミストとしてのディヴィッド・  
ヒューム 田 中 敏 弘  
マルサスの価値および分配論  
橋 本 比登志  
十二月七日  
十九世紀前半の英国の新聞・雑誌の  
概況 張 光 夫  
**昭和三十九年** (一九六四年)  
一月十九日  
『ロビンソン物語』における宗教と経  
済 天 川 潤次郎  
四月二十五日  
N. W. Senior の経済学の特徴  
福 原 行 三  
五月三十日  
大正後期以降のリカアドウ導入史  
真 実 一 男  
六月二十七日  
リカアドウ経済学の形成について  
——一八一五～一八一七年の書簡を  
通じてみたる—— 林 登良雄  
七月二十五日  
イギリス東インド会社と中国の茶  
西 村 孝 夫  
九月十二日  
歴史家としてのスミス  
——新発見の「修辞学・美文学講義」  
を中心として—— 久 保 芳 和  
十月十日  
マーシャルの内部経済外部経済論  
——特に外部経済論を中心として——

斧 田 好 雄  
十一月二十七日  
ディヴィッド・ヒュームの公債論  
田 中 敏 弘  
十二月十二日  
R. M. Rauner, “S. Bailey and the  
Classical Theory of Value” につい  
て 橋 本 比登志  
**昭和四十年** (一九六五年)  
一月三十日  
パーソンズの行為理論における功利主  
義の把握 張 光 夫  
三月二十日  
イギリス近代化に対する非国教徒専門  
学校の意義 天 川 潤次郎  
五月十五日  
シイニョアの経済学について  
福 原 行 三  
六月十九日  
キャリコ論争の経済的意義  
西 村 孝 夫  
七月二十四日  
マルサスとペイリーの価値尺度論争  
橋 本 比登志  
八月二十四日  
アメリカにおける初期マルクス研究の  
一動向  
—— R. Tucker, Philosophy and Myth  
in Karl Marx, 1961 を中心に——  
重 田 晃 一  
十月十六日  
近代経済学における相対主義の系譜  
(1)  
——メンガーを中心に——

金 田 良 治  
十二月十一日  
近代経済学における相対主義の系譜  
(2)  
——クニースを中心に——  
金 田 良 治  
昭和四十一年（一九六六年）  
一月二十二日  
ブローグのリカドウ解釈について  
真 実 一 男  
四月十六日  
道徳哲学講座創設をめぐって  
久 保 芳 和  
六月二日  
カントン貿易の機構とその推移  
西 村 孝 夫  
八月十日  
リカドウ経済学、とくに資本蓄積論  
の形成過程における問題点について  
——一八一七～一九年のリカドウ  
書簡を中心として——  
林 登良雄  
九月二十五日  
『ドイツ・イデオロギー』第一篇の新編  
輯をめぐって——バガトゥーリヤ新版  
と広松案—— 重 田 晃 一  
十二月十八日  
J・B・クラークの経済学  
田 中 敏 弘  
昭和四十二年（一九六七年）  
四月二日  
アメリカにおけるスペンサー学説の受  
容 張 光 夫  
五月十四日

ピュリタニズムの本質  
——倫理のための職業観につい  
て—— 天 川 潤次郎  
六月二十五日  
J・E・ケアンズについて  
福 原 行 三  
七月二十三日  
Jardine Matheson and Company につ  
いて 西 村 孝 夫  
八月二十日  
『国富論』の編別構成についての覚え  
書 和 田 重 司  
九月十七日  
J・S・ミルの土地所有論  
長谷川 隆 彦  
十月十五日  
最近のソビエト労働者の消費生活の状  
態 金 田 良 治  
十二月十日  
アーノルド・トインビーの終末論  
山 本 武 司  
昭和四十三年（一九六八年）  
一月十四日  
フランクリン論考  
——最近十年間におけるフランクリン  
研究の進展—— 久 保 芳 和  
三月三十一日  
我国における近代経済学の導入につい  
て 真 実 一 男  
四月二十八日  
J・B・クラークにおける効用価値論  
の形成 田 中 敏 弘  
五月二十六日  
福沢諭吉とピュリタンの経済倫理

天 川 潤次郎  
七月二十一日  
社会主義以前のウィリアム・モリス  
張 光 夫  
八月十八日  
ジェームズ・マセソンの自由貿易観  
西 村 孝 夫  
十月六日  
ホエートレーの経済学について  
福 原 行 三  
十一月十七日  
『資本論』における賃労働分析  
和 田 重 司  
**昭和四十四年** (一九六九年)  
一月二十六日  
十八世紀土地税とトマス・スペンス  
長谷川 隆 彦  
四月二十七日  
我国におけるマルクス経済学の導入  
真 実 一 男  
五月二十五日  
ベンサムの財政論  
山 本 武 司  
七月二十七日  
最近のソ連邦における経済学的手法、  
特に数学的方法利用的方法的基礎  
について 金 田 良 治  
八月二十日  
経済観念の諸類型  
西 村 孝 夫  
フランス留学から帰って  
橋 本 比登志  
十月五日  
十八世紀英国の社会と文学

吉 本 良 典  
十一月十六日  
ピュリタニズムの倫理とカーネギーの  
経営理念 天 川 潤次郎  
ラスキン生誕一五〇年記念会議に出席  
して 木 村 正 身  
十二月二十一日  
スコットランドの旅とホブズボーム先生  
の演習 重 田 晃 一  
**昭和四十五年** (一九七〇年)  
三月二十九日  
J・B・クラークの限界生産力理論と  
その社会的インプリケーション  
田 中 敏 弘  
四月二十六日  
トマス・スペンスとJ・S・ミル  
——土地改革論に関する一考察——  
長谷川 隆 彦  
五月三十一日  
マルクス『経済学ノート』(一八四四)  
解釈における二つの問題——『ノー  
ト』研究史のひとこま——  
重 田 晃 一  
六月二十八日  
N・W・シニョアの利潤最終一時間  
説について 福 原 行 三  
七月十九日  
イギリス・ユートピア思想について  
伊 達 功  
八月三十日  
ウィリアム・モリスの芸術論  
張 光 夫  
九月二十七日  
アダム・スミスにおける「公平な観察者」

について 篠 原 久  
十月二十七日  
日本人の経済感覚  
西 村 孝 夫  
十一月二十九日  
ニューディール政策の思想的基礎  
— 社会的福音よりニューディール  
へ— 天 川 潤次郎  
**昭和四十六年（一九七一年）**  
一月十日  
河上肇と古典経済学  
—『資本主義経済学の史的発展』  
を中心として— 杉 原 四 郎  
四月十八日  
戦後ソ連における重工業優先経済思  
想と消費財優先思想の変遷  
—マレンコフ・フルシチョフ・ブレ  
ジネフを中心として—  
金 田 良 治  
五月二十三日  
グリュンペルク・アルヒーフについて  
—その構成と主要内容—  
重 田 晃 一  
七月十八日  
ペンサムの circulating annuities につ  
いて 山 本 武 司  
八月八日  
アメリカ経済学会の成立  
久 保 芳 和  
九月十九日  
穀物法撤廃運動とチャーティスト運動  
一八三八～一八四二  
安 保 則 夫  
十月十七日

ジョージ・ボッターと土建争議  
— Webb の新型組合の再検討—  
大 前 朔 郎  
十一月二十八日  
古典派異端研究の一齣  
岡 本 祐 次  
十二月十九日  
スミスとヒューム  
—正金の自動調節メカニズムをめ  
ぐって— 田 中 敏 弘  
**昭和四十七年（一九七二）**  
一月三十日  
ラドイツ研究への若干の考察  
真 実 一 男  
三月二十六日  
比較生産費から相互需要説への展開  
—J・S・ミルの国際価値論を中心  
として— 長谷川 隆 彦  
四月三十日  
W. S. Jevons 研究—彼の純粋経済  
学の全体的把握について—  
井 上 琢 智  
六月四日  
マカロックについて  
福 原 行 三  
七月九日  
ミルズのパワー・エリート論をめぐる諸  
見解 張 光 夫  
八月十三日  
アダム・スミス『初期著作集』につい  
て  
—編集者 J.R. Lindgren の見解を  
中心に— 篠 原 久  
九月十日

重商主義的帝国建設の二つの構想  
守 矢 洋  
十月十五日  
ジャーディン・マセソン会社文書につ  
いて 西 村 孝 夫  
十二月三日  
ブラジルの近代化とイギリス  
——近代化の理念としての自由放任  
と保護主義 天 川 潤次郎  
**昭和四十八年（一九七三年）**  
一月十四日  
トム・マンとオーストララシア労働運動  
安 保 則 夫  
三月十八日  
新しいマルクス＝エンゲルス全集につ  
いて 杉 原 四 郎  
四月二十二日  
Webb の社会・経済理論について  
——ナショナル・ミニマム論を中心  
に—— 大 前 朔 郎  
五月二十七日  
ドイツ・イデオロギーの新編集につ  
いて 重 田 晃 一

**四国学院大学に於ける研究会**

〔四国学院大学学長住宅〕

**昭和四十二年（一九六七年）**

五月十九日  
福祉国家主義の由来  
岡 田 藤太郎  
六月十七日  
マルサス思想の概観  
——『人口論』第六版を中心とし  
て—— 橋 本 比登志

七月十五日  
ジャン＝ジャック・ルソーにおける音楽  
の問題——ルソー体系の統一的把握  
のための一試論——

山 崎 怜

八月二十六日  
三谷隆正の法思想について

武 邦 保

九月二十三日  
トマス・モアの『ユートピア』について  
——その研究史的考察——

伊 達 功

十一月十八日  
デューイ教育思想とドイツ観念論

山 本 巖

**昭和四十三年（一九六八年）**

二月三日  
清末改革運動の展開

深 沢 秀 男

六月一日  
キリスト教倫理の方法と課題

宇佐神 正 明

七月六日  
部落解放の思想

吉 田 卓 司

九月七日  
シュマーレンバッハ動的貸借対照表観

平 林 喜 博

十一月二日  
欧米社会福祉学の動向

岡 田 藤太郎

**昭和四十四年（一九六九年）**

一月十八日  
A・スミスにおける国家



入 江 奨

三月二十一日(最終回)

研究生生活をふりかえって

堀 経夫先生

【付3】

「堀研究会会員の皆様へ」

朝夕の寒気がひとしお厳しく感じられる今日このごろ、皆様には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。堀経夫先生がご永眠されてからはや二カ月が経ちました。(一九八三年)九月二十日の告別式、十月三日の関西学院大学での大学葬には、ご多忙のところ多数ご参列いただき厚く御礼申し上げます。納骨式は十一月三日に、神戸市営ひよどりごえ墓園もくせい地域にて執り行なわれました。

さて、長い伝統と学問的情熱に支えられてきましたわたくしたちの「堀研究会」は、堀先生を失った今、残念ながらこれで解散せざるをえなくなりました。堀先生宅での「堀研究会」は、戦後は、(一九四六年)昭和二十一年七月より(一九八一年)昭和五十六年三月まで、三十五年間にわたって活発な研究活動を行なってきたものであり、これはわが国の研究会の中でも類例をみないものでありました。この研究会活動は、このまま終わらせることなく、堀先生のご遺志を継ぎまして、ぜひとも新たな形で展開されるべきものと考えられます。

つきましては、次のような方向で、研究会を実質的に存続させていく計画をいたしておりますので、皆様方の積極的なご参加とご協力をお願い申し上げます。

記

- 一、研究会の名称は、(経済思想史・社会思想史を含む広義の)「経済学史研究会」とする。
- 一、会場は、関西学院大学内(商経研究館)とする。
- 一、研究会の会員は、久保芳和会員を中心に「堀研究会」の会員中、一応関西学院大学関係者と主要なメンバーとし、他の会員でこの趣旨に賛同される方々を歓迎する。
- 一、例会は、原則として毎月一回、土曜日の午後に行なう。

現在のところ上のような基本線を考えておりますが、とりあえず明年(一九八二年)の一月に第一回の例会を開催し、今後の研究会の運営等につきましてご相談いたしたいと思います。

右の趣旨にご賛同いただき、かつ「経済学史研究会」にご参加していただけますならば、その旨(篠原まで)折り返しご一報下さいますれば幸甚に存じます。

また、ご意見、ご助言等ございましたら、ぜひお聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

昭和五十六年（一九八一年）十一月十八日

#### 追伸

末尾になりましたが、「堀研究会」の会計報告を簡単にさせていただきます。会員の皆様方より、「夏季謝礼・お見舞い金」および「供花料」としまして、それぞれ二千円をお送りいただきましたが、これらは、七月二十九日と、九月二十日に、それぞれ合計額として六万円支出いたしました。現在の研究会の残金は約一万五千円となっております。

【付 4】

経済学史研究会 例会記録  
(2009 年 12 月現在)

回 (年月)	報告者	論 題
1 回 (1982.1)	井上 琢智	Papers and Correspondence of W.S. Jevons の完結をめぐって
2 回 (1982.3)	張 光夫	レイモンド・ウィリアムズとイギリス地域主義の問題
3 回 (1982.4)	金田 良治	高田保馬の貧困論と国民生活論
4 回 (1982.6)	橋本 比登志	セーの『国富論』ノートについて
5 回 (1982.7)	渡辺 恵一	A. スミスの分業論とマルクス
6 回 (1982.8)	林 登良夫	アントーニオ・ラブリオーラ (1843-1904) と F. エンゲルス—その始めての出会いからエンゲルスの死まで—
7 回 (1982.9)	久保 芳和	堀経夫先生とその学統
	眞実 一男	堀経夫先生とリカードウ研究
	杉原 四郎	堀経夫先生と日本経済学史研究
8 回 (1982.10)	渡辺 邦博	『国富論』における「銀の価値の変動に関する余論」について
9 回 (1982.12)	丸山 武志	初期リカードウの貨幣論
10 回 (1983.2)	天川 潤次郎	18 世紀のイギリス社会における「消費」の重要性—理論と実際の側面から—
11 回 (1983.3)	多田 顕	作田荘一の経済理論
12 回 (1983.4)	篠原 久	スコットランド啓蒙思想の研究動向—ニコラス・フィリップスンの見解をめぐって—
13 回 (1983.6)	田中 秀夫	ジョン・ミラーの『イギリス統治史論』について
14 回 (1983.7)	竹本 洋	アイルランドで調べたこと、考えたこと
15 回 (1983.8)	熊谷 次郎	マンチェスター商工会議所 1837 - 47 年
16 回 (1983.9)	井上 琢智	ジェヴォンズの貨幣論および景気変動論
17 回 (1983.10)	長谷川 隆彦	ケアンズのバステティア論をめぐる諸問題
18 回 (1983.12)	重田 晃一	新聞諸雑誌からみたマルクス没後 100 周年記念の動向
19 回 (1984.1)	金田 良治	高田保馬の社会主義論について
20 回 (1984.3)	橋本 比登志	ウィクセル『経済学講義 I』の翻訳を終えて
21 回 (1984.4)	渡辺 恵一	アダム・スミスの価値論—重商主義批判の基礎理論—
22 回 (1984.6)	柳田 芳伸	マルサス『人口論』初版について—マルサス埋論との関係について—
23 回 (1984.7)	飯塚 正朝	ハイランドを中心とした 18 世紀スコットランド農業史の一側面—J. ステュアート及びスミス農業論の背景—
24 回 (1984.8)	渡辺 邦博	ゴールドスミス=クレス文庫を使ってみて
25 回 (1984.9)	田中 敏弘	堀経夫先生とその経済学史研究—リカードウ研究について—

経済学史研究会 例会記録

(2009 年 12 月現在)

回 (年月)	報告者	論 題
26 回 (1984.10)	梁 成一	リカードの外国貿易論
27 回 (1984.12)	張 光夫	19 世紀末英国における反産業主義の位置—ウィーナーとウィリアムズの所説に関連して—
28 回 (1985.1)	多田 顕	作田荘一の世界経済論
29 回 (1985.4)	杉原 四郎	教科としての経済学史
30 回 (1985.6)	生越 利昭	ジョン・ロック研究の新視角—ウッドの所説によせて—
31 回 (1985.7)	中西 泰之	日本人口論壇におけるマルサスとマルクス
32 回 (1985.8)	竹本 洋	王政復古期の公債問題について
33 回 (1985.9)	斧田 好雄	マーシャルの後継者任命をめぐる
34 回 (1985.10)	田中 秀夫	サー・ジョン・ダーリンブルの封建社会論と限嗣封土論—スコットランド啓蒙の局面—
35 回 (1985.12)	大田 一廣	18 世紀フランスにおける「体系」(Système)の概念について
36 回 (1986.2)	西沢 保	通貨改革と初期社会主義—アドウッドとオーエン—
37 回 (1986.3)	橋本 昭一	マーシャル経済学における Well-being の意味とその背景
38 回 (1986.4)	田中 敏弘	ヒュームとコート対カントリ論争
39 回 (1986.6)	渡辺 恵一	穀物法批判とスミス地代論
40 回 (1986.7)	重田 晃一	ソビエト工業化論争と正統マルクス主義
41 回 (1986.8)	熊谷 次郎	マンチュスター・スクールの経済思想
42 回 (1986.9)	渡辺 恵一	「合評会」篠原久『アダム・スミスと常識哲学—スコットランド啓蒙思想の研究—』(有斐閣、1986 年)
	篠原 久	ドゥーガルド・ステュアートとスコットランド啓蒙思想—『経済学講義』をめぐる—
43 回 (1986.10)	梁 成一	地金論争に関する一考察—J. ヴァイナー説を中心に—
44 回 (1986.12)	橋本 昭一	マーシャル『産業経済学』の体系
45 回 (1987.1)	越智 良二	貨幣不足に対するアダム・スミスの批判と彼の「再生産論」的視角
46 回 (1987.3)	柳田 芳伸	マルサスにおける奢侈と道徳的抑制
47 回 (1987.4)	中西 泰之	(1) 高田保馬：一般均衡理論と硬直賃金 (2) 『人口論』と『経済学原理』の政策的統一
48 回 (1987.6)	長谷川 隆彦	価値論と需給論—J. ホランダールのミル研究について—
49 回 (1987.7)	生越 利昭	スコットランド啓蒙思想における所有権の問題

経済学史研究会 例会記録

(2009 年 12 月現在)

回 (年月)	報告者	論 題
50 回 (合宿 1987.8)	飯塚 正朝	J. アンダーソンの『諸考察 (Observations of...)』
	大田 一廣	ディドロ・グランベール編『百科全書』の貨幣論について
	久保 芳和	経済思想史国際会議に参加して
	竹本 洋	学会展望
51 回 (1987.9)	渡辺 邦博	J. ステュアートの穀物政策論—『ラナーク州の利益』の基本構成—
52 回 (1987.10)	入江 奨	マルサスの文芸協会での諸報告をめぐって
53 回 (1987.12)	橋本 昭一	合評会：井上琢智『ジェヴォンズの思想と経済学—科学者から経済学者へ—』(日本評論社 1987)
54 回 (1988.1)	奥田 聡	地代論争と初期リカードゥ
55 回 (1988.3)	磯川 曠	マーシャルの倫理学と経済学—シジウィックとの関連—
56 回 (1988.4)	天川 潤次郎	フランクリンとフィラデルフィアと日本
57 回 (1988.6)	熊谷 次郎	コブデン・クラブについて
58 回 (1988.7)	越智 良二	A. スミスの分業論と貨幣論の関係について
59 回 (合宿 1988.8)	橋本 昭一	『経済学史』文献におけるマーシャルの位置
	斧田 好雄	1903 年の関税改革運動とマーシャル
	竹本 洋	ポリティカル・エコノミーによる近代社会の発見
60 回 (1988.10)	西沢 保	Ashley, Hewins, 「イギリス歴史学派」をめぐって
61 回 (1988.12)	吉尾 清	D. デイヴィスと Poor Law
62 回 (1989.3)	田中 敏弘	J.B. クラークの特殊生産力的分配論をめぐる諸批判
63 回 (1989.4)	横山 照樹	1800 年前後の穀物法論争
64 回 (1989.6)	入江 奨	古典派労働体系論の基礎
65 回 (1989.7)	浅羽 良昌	1740 年のマサチューセッツ土地銀行企画
66 回 (合宿 1989.9)	田中 秀夫	スコットランド啓蒙研究の動向—フィリップソンのヒューム論など—
	渡辺 恵一	スミスの死亡記事について—18 世紀世スコットランドのニューズペーパー—
		スコットランド啓蒙研究に関する討論会
	磯川 曠	A. マーシャルの著作目録、および文献研究
	橋本 昭一	マーシャル研究の現状と課題
		マーシャル研究に関する討論会
67 回 (1989.10)	喜多見 洋	J.B. セイによるリカード経済学批判
68 回 (1989.11)	熊谷 次郎	合評会：久保芳和他編『スミス、リカードゥ、マルサス』
	渡辺 恵一	合評会：田中敏弘編『スコットランド啓蒙と経済学の形成』
69 回 (1989.12)	長谷川 隆彦	J.S. ミル：地代論の検討

経済学史研究会 例会記録

(2009 年 12 月現在)

回 (年月)	報告者	論 題
70 回 (1990.3)	斧田 好雄	マーシャルの外国貿易の純粹理論
71 回 (1990.4)	橋本 比登志	ヴィクセル紀行
72 回 (1990.6)	Eugene Rotwein	Economic Methodology : A historical-critical View
73 回 (1990.7)	久保 芳和	制度派経済学の思考的基礎についての一考察
74 回 (合宿 1990.8)	竹本 洋	ヒュームについて
	渡辺 恵一	合評会:田中敏弘編『古典経済学の生成と展開』(日本経済評論社)
		古典経済学全般をめぐる討論
	大田 一廣	合評会:浅羽良晶『アメリカ植民地土地銀行史論』(日本経済評論社)
	篠原 久	18 世紀スコットランドの道徳哲学
75 回 (1990.10)	奥田 聡	F. ホーナーの通貨論
	篠原 久	合評会:飯塚正朝『国富論』と 18 世紀スコットランド経済社会』(九州大学出版会 1990)
76 回 (1990.12)	奥田 敬	ナポリ啓蒙と A. スミス
77 回 (1991.3)	安保 則夫	合評会:熊谷次郎『マンチェスター派経済学思想史研究』(日本経済評論社)
78 回 (1991.4)	井上 琢智	マーシャル経済学の日本への導入
79 回 (1991.6)	田中 秀夫	スコットランド啓蒙思想史研究—文明社会と国制—
80 回 (1991.7)	渡辺 邦博	J. スチュアートをめぐる 2, 3 のことがら
81 回 (1991.8)	西井 徹幸	A. スミス『修辞学・文学講義』をめぐる一問題
82 回 (合宿 1991.9)	入江 奨	堀経夫先生とスミス、マルサス研究
	眞実 一男	堀経夫先生とリカードウ派社会主義
	田中 敏弘	堀経夫先生と日本経済学史研究
	久保 芳和	堀経夫先生とマルサス研究
83 回 (1991.11)	磯川 曠	マーシャルとシジウィック
84 回 (1991.12)	竹本 洋	合評会:生越利昭『ジョン・ロックの経済思想』(晃洋書房)
85 回 (1992.3)	篠原 久	トマス・リードと「実践倫理学」
86 回 (1992.4)	重田 晃一	旧ソビエト型社会主義とは何であったか—その変質と退落を考える—
87 回 (1992.6)	渡辺 恵一	スミス文明社会像の再構成
88 回 (1992.7)	柳田 芳伸	後期マルサスの Industry 論
89 回 (合宿 1992.8)	熊谷 次郎	世紀転換期の複本位制論
	田中 敏弘	経済学史家としての J. ドーフマンと日本におけるアメリカ経済学史研究
	新村 聡	アダム・スミス問題再考
90 回 (1992.10)	長谷川 隆彦	ミルと J. レイ—分業論を中心として—
91 回 (1992.12)	久保 芳和	マルサス学会とマルサス研究文献
92 回 (1993.3)	塘 茂樹	バーム・バヴェルクの生涯と著作

# 経済学史研究会 例会記録

(2009 年 12 月現在)

回 (年月)	報告者	論 題
93 回 (1993.4)	浅羽 良昌	フランクリンの土地銀行構想
94 回 (1993.6)	奥田 聡	J. スチュアートの利子論
95 回 (1993.7)	柳田 芳伸	リチャード・ジョーンズの人口原理—マルサス説と対比させて—
95 回 (合宿 1993.8)	篠原 久	スコットランド啓蒙末期の諸問題
	西井 徹幸	スミスのレトリックと富裕の自然的進歩
	竹本 洋	J. スチュアート『経済の原理』の体系的理解—均衡理論を中心に—
97 回 (1993.10)	小林 昇	経済学の成立—A. スミスと J. スチュアート—
98 回 (1993.12)	井上 琢智	イギリス留学生・お雇い外国人—幕末・明治の近代化を支えたひとびと—
99 回 (1994.3)	渡辺 邦博	J. スチュアートの関係資料を求めて
100 回 (1994.4)	橋本 昭一	マーシャルの産業組織論
101 回 (1994.6)	竹本 洋	スチュアート『経済の原理』1 編の人口論について
102 回 (1994.7)	越智 良二	アダム・スミスの『価値』論の基礎
103 回 (合宿 1994.8)	大田 一廣	ケネー生誕 300 年記念国際シンポジウムについて
	飯塚 正朝	J. アンダーソンのスミス経済理論批判
	渡辺 恵一	『法学講義』の経済理論—A. スミスの分業論を中心に—
	柳田 芳伸	マルサスの先行者としての J. スチュアート
104 回 (1994.9)	Tiziano Raffaelli	Order and creativity in Marshall's view of social progress
105 回 (1994.11)	生越 利昭	ロックの貨幣論について
106 回 (1994.12)	渡辺 恵一	合評会：新村聡『経済学の成立—アダム・スミスと近代自然法学—』（御茶の水書房 1994）
107 回 (1995.4)	植村 邦彦	マルクスのアソシアシオン論
108 回 (1995.6)	松井 名津	経済学の意義と目的—J.S. ミルの場合—
109 回 (1995.7)	竹本 洋	経済学の成立問題—スチュアート研究の立場から—
110 回 (合宿 1995.8)	熊谷 次郎	合評会：西沢保『異端のエコノミスト—19 世紀バークミンガム派の経済政策思想—』（岩波書店 1994）
	西沢 保	合評会：熊谷次郎『イギリス綿業自由貿易論史—マンチェスター商業会議所 1820-1932 年—』（ミネルヴァ書房 1995）
	塘 茂樹	ヴィクセルの初期経済学研究
111 回 (1995.11)	橋本 昭一	ケインズ「マーシャル」（『人物評伝』）について
112 回 (1995.12)	渡辺 恵一	『道徳感情論』における倫理学と政治学—初版を中心に—
113 回 (1996.3)	飯塚 正朝	合評会：竹本洋『経済学体系の創成—ジェームズ・スチュアート研究—』（名古屋大学出版会 1995）
114 回 (1996.4)	坂 昌樹	ドイツ啓蒙へのアプローチ



経済学史研究会 例会記録

(2009 年 12 月現在)

回 (年月)	報告者	論 題
115 回 (1996.5)	出雲 雅志	生活と文化と芸術の経済思想—ラスキンとモリスをめぐって—
116 回 (1996.7)	御崎 加代子	ワルラスはリカード主義者であったのか?—森嶋氏への返答との関連で—
117 回 (合宿 1996.8)	渡辺 邦博	最近の J. スチュアート研究をめぐって
	渡辺 恵一	『国富論』の成立—最近のスミス研究史から—
	新村 聡	A. スミスの社会契約説批判と〈権威の原理〉
118 回 (1996.10)	西村 徹幸	A. スミスのレトリック講義—『国富論』第 5 篇との関連で—
119 回 (1996.12)	磯川 曠	初期マーシャルの力学的類同
120 回 (1997.3)	本郷 亮	初期ピグーにおける H. シジウィックの影響
121 回 (1997.4)	松井 名津	J.S. ミルにおける税制論
122 回 (1997.5)	中澤 信彦	エドマンド・バークの救貧思想
123 回 (1997.7)	田中 敏弘	J.B. クラークと F.H. ギディングス (台風のため中止となり、第 124 回例会時に報告)
124 回 (合宿 1997.8)	奥田 聡	J. スチュアートの金融論と 18 世紀金融史研究
	渡辺 恵一	租税の経済学—スミスを中心として—
	塘 茂樹	ベーム・バヴェルクの新しい講義録について
125 回 (1997.11)	田中 秀夫	ジョン・ミラーの講義ノート
126 回 (1997.12)	竹村 和也	ケイムズ卿の自然法
127 回 (1998.1)	Eugene Rotwein	The Ideology of Wealth and Liberal Economic Heritage : The Neglected Views.
128 回 (1998.3)	松井 名津	マカロックと J.S. ミルの租税改革論
129 回 (1998.4)	橋本 昭一	マーシャルと協同組合
130 回 (1998.6)	古谷 弘幸	アダム・スミスの実践道徳論—『道徳感情論』第 6 部を中心に—
131 回 (1998.7)	新村 聡・ 篠原 久	合評会: 田中正司『アダム・スミスの倫理学—『道徳感情論』と『国富論』—』上・下 (御茶の水書房 1997)
132 回 (合宿 1998.8)	竹本 洋	スチュアート研究からの展開の可能性—『経済の原理』の翻訳を終えて—
	大田 一廣	J. スチュアートとフランス
133 回 (1998.11)	中澤 信彦	エドマンド・バーク—ペイン、マルサスとの秘められた論争—
134 回 (1998.12)	御崎 加代子	均衡アプローチの社会哲学的基礎—ワルラスの場合—
135 回 (1999.3)	越智 良二	越智良二『アダム・スミスの貨幣論の研究』(青葉図書 1998)
136 回 (1999.4)	本郷 亮	ピグーと現代厚生経済学—A. センの功利主義批判との関連で—

経済学史研究会 例会記録

(2009 年 12 月現在)

回 (年月)	報告者	論 題
137 回 (1999.7)	植村 邦彦	資本主義と「ユダヤ人支配」— 19 世紀ドイツの「言説」の歴史—
138 回 (合宿 1999.8)	中澤 信彦	合評会：柳田芳紳『マルサス勤労階級論の展開』
	柳田 芳伸	シーニアの福利論—マルサスとの対比において—
	生越 利昭	「公共性」概念をめぐる—ヒュームとスミスを中心に—
139 回 (1999.10)	西井 徹幸	アダム・スミスの企業家像について
140 回 (1999.12)	渡辺 邦博	晩年のスチュアートと『チャーマーズ文書』
141 回 (2000.4)	坂 昌樹	ゲッティンゲン啓蒙における官房学の展開
142 回 (2000.6)	北田 了介	ミシェル・フーコーのアダム・スミス論
143 回 (2000.7)	西岡 幹雄	本多利明の「自然治道」論と「西域」型経世学（政治経済思想）
144 回 (合宿 2000.8)	渡辺 恵一・ 篠原 久	J.S. ロス著、篠原・只腰・松原訳『アダム・スミス伝』（シュプリング・フェアラーク東京 2000）をめぐる
	竹本 洋	『国富論』における〈歴史〉をめぐる
	奥田 聡	合評会：中矢俊博・柳田芳伸編著『マルサス派の経済学者たち』（日本経済評論社 2000）
145 回 (2000.10)	Ian Simpson Ross	Biography as a Guide to Understanding Adam Smith's Thought
146 回 (2000.12)	田中 敏弘	アメリカ初期自由主義経済学
147 回 (2001.3)	熊谷 次郎	『プリティッシュ・マーチャント』誌を読み直す
148 回 (2001.4)	中澤 信彦	フォックス派ウィッグとしてのマルサス—初版『人口論』成立史の一断面—
149 回 (2001.6)	北田 了介	「ポリース」概念の展開と「ポリティカル・エコノミー」の登場—M. フーコーにおける「統治性」（gouvernementalite）研究をめぐる—
150 回 (合宿 2001.8)	篠原 久	「18 世紀スコットランド学会」・「国際アダム・スミス学会」共同会議に参加して
	田中 敏弘	制度主義経済学の新展開と現状
	渡辺 邦博	ジェイムズ・スチュアートをめぐる人物群
151 回 (2001.10)	逸見 修二	フランソワ・ギゾーの「文明」概念をめぐる考察
152 回 (2001.12)	中澤 信彦	マルサスとスミス—初版『人口論』第 5 章を中心に—
153 回 (2002.3)	井上 琢智	W.S. ジェヴォンズとアポリジニー問題 —ディーブ・エコロジーへの道—
154 回 (2002.4)	上宮 智之	W.S. ジェヴォンズ『石炭問題』における経済学
155 回 (2002.6)	中野 力	ロバート・ウオーレスのユートピア像—『展望』におけるユートピア設立の可能性をめぐる—

経済学史研究会 例会記録

(2009 年 12 月現在)

回 (年月)	報告者	論 題
156 回 ( 合宿 2002.8)	本郷 亮	「ケインズ革命」への道—シジウィック=ピグー vs. ムーア=ケインズ—
	渡辺 恵一	戦後スミス研究の射程—内田・小林論争をめぐって—
	竹本 洋	『国富論』における「不確実性」の問題
157 回 (2002.10)	天川 潤次郎	『日本教会史』(1617-20 年)に見られた日本茶道の精神 試論—「市中の山居」再考—
158 回 (2002.12)	田中 敏弘・ 本郷 亮	合評会：田中敏弘『アメリカの経済思想—建国期から現代まで—』(名古屋大学出版会、2002 年)
159 回 (2003.3)	熊谷 次郎	デフォアの Circulation of Trade について
160 回 (2003.4)	橋本 比登志	ヴィクセル、セー紀行
161 回 (2003.6)	新村 聡	ヒュームの平等論と奢侈論
162 回 ( 合宿 2003.8)	中澤 信彦	政治家の条件—エドマンド・バークとシヴィック・ヒューマニズム—
	柳田 芳伸	生産的階級としてのマルサス勤労階級論
	竹本 洋	『国富論』と『道徳感情論』との関係—『国富論』第 3 版改訂説を中心に—
163 回 (2003.10)	本郷 亮	A.C. ピグーの『失業の理論』—20 年代不況の理論的表現として—
164 回 (2003.12)	壽里 竜・ 奥田 聡	合評会：T.Sakamoto & H.Tanaka (ed.), The Rise of Political Economy in the Scottish Enlightenment, Routledge, London & New York. 2003.
165 回 (2004.3)	原田 哲史	ユストゥス・メーザーの国家・経済論の一側面—「普遍的な法律や法令を求める現今の傾向は民衆の自由にとって危険である」(1772)および「小さな都市ひとつひとつにも異なった政治制度を与えるべきではないのか」(1777)をめぐって—
166 回 (2004.4)	渡辺 邦博	スチュアートの系図作成から見えてくるもの
167 回 (2004.6)	中野 力	ロバート・ウォーレスのユートピア像—人智と神慮との関連で—
168 回 ( 合宿 2004.8)	竹本 洋	スミスの気にかかる一、二の論述
	北田 了介	フーコーにおける主体化の問題について—コレージュ・ド・フランス講義『《社会を守らなければならない》』と『主体の解釈学』を中心に—
	奥田 聡	J. スチュアートの複本位制分析について
169 回 (2004.10)	三好 宏治	『国富論』の成長モデル作成時における時間の取り扱いに関しての一考察—いわゆる生産的資本の循環に基づかないで—
170 回 (2004.12)	壽里 竜	第 31 回・国際ヒューム・コンファレンスに参加して

経済学史研究会 例会記録

(2009 年 12 月現在)

回 (年月)	報告者	論 題
171 回 (2005.3)	古家 弘幸	中道政策としての自由貿易論—アダム・スミス『国富論』の一側面—
172 回 (2005.4)	中井 大介	シジウィックの分配論
173 回 (2005.6)	上宮 智之	F.Y. エッジワースとトリニティ・カレッジ・ダブリン
174 回 ( 合宿 2005.8)	中澤 信彦	ポーブ、パーク、マルサスと「存在の連鎖」—階層秩序から経済秩序へ—
	本郷 亮	ビグーがめざしたもの—福祉国家と福祉社会—
	田中 敏弘	J.B. クラークとヴェブレン
175 回 (2005.10)	Ian Simpson Ross	The Emergence of David Hume as a Political Economist : A Biographical Sketch
176 回 (2005.12)	森 直人	ヒューム『政治論集』における勢力均衡の意義
177 回 (2006.3)	新村 聡・ 中澤信彦	合評会：竹本洋『「国富論」を読む』（名古屋大学出版会、2005 年）
178 回 (2006.4)	中野 力	ロバート・ウォーレスの『人口論』と『諸特徴』との関連について—1745 年草稿を中心に—
179 回 (2006.6)	南森 茂太	神田孝平『農商弁』における財政思想
180 回 ( 合宿 2006.8)	本郷 亮	ビグーの産業変動論の展開—1929 年の雇用乗数論を中心に—
	中澤 信彦	ブリテンにおけるフランス革命—若干のサーヴェイ—
	橋本 昭一	マーシャル地代論の視点
181 回 (2006.10)	北田 了介	ミシェル・フーコーにおける「反—導き」としての政治—「戦争」から「統治性」—
182 回 (2006.12)	橋本 昭一	合評会：田中敏弘『アメリカ新古典派経済学の成立—J.B. クラーク研究—』（名古屋大学出版会、2006 年）
183 回 (2007.3)	古谷 豊	ジェイムズ・スチュアート信用論の形成
184 回 (2007.4)	森 直人	正義の遵守と統治の安定—ヒューム社会認識における複線的構造についての考察—
185 回 (2007.6)	中野 力	ロバート・ウォーレス『人口論』『付録』と『展望』の研究—人口論をめぐる「書簡集」や「草稿」を中心に—
186 回 ( 合宿 2007.8)	奥田 聡	合評会：渡辺邦博『ジェイムズ・スチュアートとスコットランド—もうひとつの古典派経済学—』（ミネルヴァ書房、2007 年 4 月）
	松本 哲人	ブリストリの道徳哲学
	古家 弘幸	アダム・スミスと現代
187 回 (2007.10)	西岡 幹雄	合評会：井上琢智『黎明期日本の経済思想—イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化—』（日本経済評論社、2006 年）

経済学史研究会 例会記録

(2009 年 12 月現在)

回 (年月)	報告者	論 題
	門 亜樹子	ロックと集団帰化問題
188 回 (2007.12)	竹本 洋	非・戦後啓蒙の一つのモデル—小林昇における戦争体験とその思想化—
189 回 (2008.3)	中澤 信彦	ステュアート、スミス、マルサスと《需要定義問題》
190 回 (2008.4)	久松 太郎	ウエストおよびトレنزの地代論
191 回 (2008.6)	北田 了介	フーコーにおける権力と抵抗をめぐる二つの分折モデル
192 回 ( 合宿 2008.8)	南森 茂太	神田孝平の地租改革にかんする建議書—『農商辦』と民選議院についての諸論文との関係—
	渡辺 恵一	スミス労働価値論研究の現状と課題
	橋本 昭一	合評会：本郷亮『ビグーの思想と経済学—ケンブリッジの知的展開のなかで—』（名古屋大学出版会、2007 年）
193 回 (2008.10)	松本 哲人	所有・救貧・神学的功利主義 — J. プリーストリと W. ペイリー—
194 回 (2008.12)	中澤 信彦	バークとマルサスにおける慎慮の政治経済学—「エコノミストの時代」と「純潔の徳」—
195 回 (2009.3)	古家 弘幸	トーマス・ペップバーン『オークニ諸島の貧困』（1760 年）
196 回 (2009.4)	森 直人	ヒュームの両義性とは何か——人間本性の二面的理解から文明社会の両義性まで——
197 回 (2009.6)	門 亜樹子	ジャン・バルベイヤック「道徳科学の歴史的・批評的解説」（1706 年）の紹介
	山田 祥夫	転形問題についての一考察—いわゆる「逐次修正」問題に関して
198 回 ( 合宿 2009.8)	上宮 智之	F.Y. エッジワースと男女労働賃金論
	新村 聡	アダム・スミスの社会契約説批判——共感論との公法論との関連をめぐって——
	篠原 久	合評会：中澤 信彦『イギリス保守主義の政治経済学——バークとマルサス——』（ミネルヴァ書房、2009 年）
199 回 (2009.10)	中野 力	海外における主要なロバート・ウォーレス研究のサーベイ
200 回 (2009.12)	井上 琢智	W.S. ジェヴォンズと功利主義
	田中 敏弘	経済学史研究会の回顧と展望— 200 回例会を記念して—



























